

熊本城(銀杏城)(国重文, 国特別史跡, 百名城)(熊本市中央区)(熊本城公園)

熊本市北区植木町の中心から南に伸びる舌状台地(京町台地)の尖端、茶臼山丘陵一帯に築かれた平山城。現在の地名では中央区の本丸、二の丸、宮内、古城、古京町、千葉城町に当たる。

中世に千葉城、隈本城が築かれ、安土桃山時代末期から江戸時代初期にかけて加藤清正がこれを取り込み、現在のような姿の熊本城を築いた。日本三名城の一つとされ、「清正流(せいしょうりゅう)」と呼ばれる石垣の上に御殿、大小天守、五階櫓などが詰め込んだように建てられ、一大名の城としては「日本一」であるとの評価がある。

細川氏の居城となった後も盛んに改築が行われ、明治時代の初めまでは大半の建物が撤去されずに現存していたが、熊本鎮台が置かれた後に建物や石垣、曲輪の撤去や改変が行われ、西南戦争で一部の建物を残して天守を含む御殿や櫓など主要な建物を焼失した。現在は、宇土櫓や東竹之丸の櫓群が残る(建物が失われる経緯は、同項の歴史(明治時代以降)を参照のこと。)。石垣普請の名手とされる清正が築いた石垣は、1889年(明治22年)の熊本地震で石垣の一部が崩落し、改修された部分があるものの、ほぼ江戸期の改築による変遷の痕跡をとどめ、城跡は特別史跡に指定されている。昭和時代中期には大小天守と一部の櫓が外観復元され、近年では、櫓や御殿などの主要な建物を木構造で復元する事業が行われている。サクラの名所としても知られており、日本さくら名所100選に選定されている。

千葉城・隈本城時代

文明年間(1469年 - 1487年)に肥後守護菊池氏の一族・出田秀信が千葉城(ちばじょう、現在の千葉城町)を築いたのが始まりである。

その後、出田氏の力が衰え、大永・享禄年間(1521年 - 1531年)に菊池氏は代わりに託麻・鮑田・山本・玉名4郡に所領を持つ鹿子木親員(寂心)に隈本城(くまもとじょう、現在の古城町)を築かせて入れた。寂心は藤崎八幡宮の遷宮を行い、1529年(享禄2年)に後奈良天皇の綸旨、1542年(天文11年)には勅額の下賜を得ている。1550年(天文19年)、豊後守護大友義鑑が家臣の謀反により殺されると、義鑑の弟で菊池氏を嗣ぎ、かつ義鑑と敵対していた守護菊池義武が隈本城に入り、寂心の孫・鹿子木鎮有はこれを迎え入れた。しかし、義鑑の子・大友義鎮により追われ、以後は大友氏に協力した城親冬が居城とした。1587年(天正15年)、豊臣秀吉の九州征伐に際し、薩摩の島津氏に属していた親冬の孫・城久基は城を明け渡し筑後国に移った。秀吉の御伽衆・大村由己の『九州御動座記』には「此所は肥後の府中なり、城十郎太郎(久基)と云者相踏候、数年相持たる名城なり」と記す。また、秀吉が柳直末に送った朱印状の中で「肥後は然るべき国に候間、羽柴陸奥守(佐々成政)おかせられ候、熊本名城に候間、居城として御普請仰せ付けられ候」と述べている。

新たに肥後の領主となり隈本城に入った佐々成政は、秀吉の指示に反して検地を強行し、肥後国人一揆を引き起こす。この時隈本城は国人衆による猛攻を受けたが、城代の神保氏張が死守して落城は免れている。1588年(天正16年)、成政は切腹を命じられ、加藤清正が肥後北半国19万5000石の領主となり隈本城に入った。

熊本城時代

加藤清正は、1591年(天正19年)から千葉城・隈本城のあった茶臼山丘陵一帯に城郭を築き始める。1600年(慶長5年)頃には天守が完成、関ヶ原の戦いの行賞で清正は肥後一国52万石の領主となる。1606年(慶長11年)には城の完成を祝い、翌年「隈本」を「熊本」と改めた。これが現在の熊本城である。1610年(慶長15年)から、通路によって南北に分断されていた本丸に通路をまたぐ形で本丸御殿の建築が行われた。これにより天守に上がるには、本丸御殿下の地下通路を通らなければならないようになった。

1632年(寛永9年)、清正の子・加藤忠広の改易により豊前小倉城主だった細川忠利が肥後54万石の領主となり熊本城に入った。このとき忠利は天守に上り清正を祀る廟所がある本妙寺の方角に向かって遙拝

したと伝えられる。忠利は城の長堀の南、坪井川を渡った所に花畑屋敷を造営し、以後歴代藩主はここを日常の居所とした。

加藤家の治世末期には、藩財政の疲弊やお家騒動により、城の修理もままならない状況であった。細川忠利は入部後、直ちに熊本城の修理を幕府に申し出ている。この修理は建築物の修繕に留まらず、本丸の増築（二様の石垣に跡が見られる）にもおよび、現在見られる縄張りはこの修理の際、完成したものである。

城郭の形式は、梯郭式平山城。広さは約 98 万平方メートル、周囲は約 5.3 キロメートルある。南西の古城と北東の千葉城を取り込み、それらを出丸としている。

南東を流れる白川を外堀に見立て、これに合流していた坪井川・井芹川を切り離して内堀としているため城内にある水堀は飯田丸の西にある備前堀 1 つのみである。本丸は丘陵の東の最も高い部分に造り全面石垣積みとし、西へゆるやかに下る二の丸・三の丸は重点箇所のみ石垣を築き、経費を抑えた。搦手口のある北は他の方面に比べ、内郭に近接しているので一般的に弱点とされるが、断崖と空堀（現在は道路）に仕切られており突破は困難である。これに対し西は開けており、多少なりとも傾斜も緩い。そのため、西出丸・二の丸・三の丸で区画し防備を固めているが、城郭西端の先に独立した小丘として段山（だにやま）がある。兵力の関係で総構えを放棄した西南戦争ではこの段山を巡る戦いが行われた。

石垣

清正は特に石垣造りを得意とし、熊本城では、始め緩やかな勾配のものが上部に行くにしたがって垂直に近くなる「武者返し」と呼ばれる形状の石垣を多用している。熊本城で使用されている武者返しは慶長の役の際に朝鮮に築かれ、難攻不落と呼ばれた蔚山倭城（うるさんわじょう）に使用した築城技術を元にしたものである。上益城郡山都町（旧・矢部町）にある通潤橋は、江戸時代末期にこの熊本城の武者返しの石垣をモデルに架けられた。江戸幕府の仮想敵であった薩摩藩に対する備えとして建造されているため、南側が非常に堅固（その分北側がかなり手薄）な構造になっている。この構造が西南戦争で薩摩軍の包囲戦をしのぐことができた要因の一つとなっている。熊本市役所前の石垣は、長さとしては日本最長である。

天守

天守は、連結式望楼型、大天守は 3 重 6 階地下 1 階、「一の天守」とも呼ばれる。小天守は 3 重 4 階地下 1 階、「二の天守」とも呼ばれ、「御上（おうえ）」という夫人のための建物である。大天守は、一般に 5 重の天守として見られているが、2 重目にあたる部分と 4 重にあたる部分のものは屋根ではなく庇とするので、正確には 3 重 6 階地下 1 階の天守である。萩城天守と同じように天守台から少し張り出す「張出造（はりだしづくり）」で、張り出し部分には石落しが設けられていた。ちなみに、城の北東に清正が建立した豊国廟跡（立田山中腹）と、城の南西の妙解寺跡（花岡山麓）にある細川家の霊廟の 2 つを結ぶ直線上に天守があるという。

小天守の天守台は大天守に被さるように造られており大天守の天守台石垣の勾配より急角度であり、また天守台と建築物の間には、名古屋城天守と同様に 60 センチメートル程の「忍び返し」という鉄串が刺してあり、再建とはいえ各所に大天守との建築時期の相違を確認できるという。これには、以下の説がある。

大天守が 1601 年に竣工し、10 年後、文禄・慶長の役で中断されたのちに増築された。

1594 年ごろに計画した際、櫓が重なり合って景観のバランスが悪いということから、現在の位置に変更され、細部でも意匠が異なっている。

『肥後宇土軍記』によると関ヶ原の戦いの翌年、加藤清正は宇土城の縄張りに不満のあるところを改修し、竣工後には自身の隠居城とすべく定めたが、この時宇土城の天守を解体して熊本城へ運び、3 層だったことから小天守と名付け、城内へ移築したと記されている。

大天守北側は、創建時には小天守がなく城の北東入り口である不開門（あかずもん）より本丸西隣の平左衛門丸へと続く通路であった。再建天守の観光入り口の橋下を望むと旧通路の階段が門扉も枳形もなく、直に小天守入り口に続く構造を確認することができる。現在は非公開だが、この階段を下ると裏五階櫓跡

と小天守の間に旧通路をふさぐように石垣が築かれている。石垣下部には、高さ1メートル程の石門という通り道があり、不開門へと続く北帯曲輪へ出ることができた。石門は堀や帯郭の清掃のための通用口として利用されていたが、過去には抜け穴や水抜き穴との説があった。。また、石門を抜けた左手にも同じ造りの石垣があり、こちらは宇土櫓へと続く犬走りへ出ることができた。

Wikipedia による

